

日時： 2021年10月15日（金） 18:30~20:00

講師： 工藤万里江氏（明治学院大学キリスト教研究所客員研究員・本学兼任講師）

会場： ZOOM ウェビナー

第84回ジェンダーセッションは、明治学院大学キリスト教研究所客員研究員・本学兼任講師の工藤万里江氏をお招きし、フェミニスト神学とクィア神学を手掛かりとして、フェミニズムとクィアの関係性についてお話いただきました。

工藤氏によれば、フェミニズムとクィアに関してよくある3つの認識があるといます。

第一に、「フェミニズムは古くクィアは新しい」という認識です。一般に、フェミニズムは古い批評枠組みであり、それに代わるより優れた枠組みとしてクィアが出てきた、という直線的な理解があります。確かに、フェミニズムは19世紀来の（あるいはもっと古い）長い歴史を持った思想である一方、クィア理論は1990年代に現れました。しかし、女性の抑圧問題は全く解消されておらず、クィア理論が登場したからといって、権力構造を問うフェミニズムの分析枠組みが不要になったわけではありません。工藤氏は、これはキリスト教の内部でも同じであるといいます。

第二に、「フェミニズムは『女性』のこと、クィアは『性的マイノリティ』のことを扱う」という理解があり、後者は前者より射程が広いと有用だと考えられています。フェミニズムが男女二元論を基盤とし、「女」という本質主義的な主体を前提として権利のために戦ってきたため、一部でレズビアンやトランス女性を排除してきたことも確かです。しかし、竹村和子のように、フェミニズムを「女」という概念を根源的に問う思想と捉え、その過程で必然的に異性愛主義を問題化してきたフェミニストもいます。この点において、起点の違いはあれどフェミニズムとクィアは同じ課題を共有していると言えます。

第三に、「フェミニズムはアイデンティティ・ポリティクス、クィアは反アイデンティティ」という認識です。アイデンティティは人間により構築されたもので神の前では意味をなさないと説き、アイデンティティを脱構築していくことに意義を見出すクィア神学者もいることは事実です。しかし工藤氏は、そうした姿勢は、アイデンティティ・カテゴリーが本質的ではないにもかかわらず現実に起こる抑圧や差別を不問にする可能性があり、クィアが本来もつ政治性を換骨奪胎する危険性があると訴えました。むしろ、クィアはアイデンティティ・カテゴリーと格闘し、抑圧構造を問題化する必要があると工藤氏は言います。

工藤氏は、フェミニズムとクィアは、家父長制と異性愛主義への抵抗、アイデンティティ・カテゴリーへの批判的視座と利用、連帯の模索、直接的な性規範のみ問題化するのではなく資本主義などの問題にも取り組むこと、という共通した課題をもっており、お互いに学びあう必要がある、と締めくくりました。

ご講演後には、Q&A機能を通じ視聴者から寄せられたたくさんの質問にお答えいただきました。キリスト教と家父長制の関係や、「インクルーシブ」や「多様性」という言葉が抑圧構造を不問にして用いられる危うさなど、活発な質疑応答で議論が深まりました。明快な分析を丁寧にお示しいただき、新たな視点をもたらしてくださった工藤氏に心よりお礼を申し上げます。

（立教大学ジェンダーフォーラム事務局 横山美和）

